

和製開発ツール「美作」の特長と採用理由

中央システム(株)東京支社営業部

平野正喜 Masaki Hirano

mau-cs@magical.egg.or.jp

アウトライン

「美作」はユニバーサルシステムズエンジニアリング(株)が開発・販売している日本製オープンシステム開発ツールであり、筆者は、そのVARパートナーの一員として、販売開始当初から技術・営業サポートを続けてきた。

本稿は、弊社が開発ツールのひとつとして「美作」をを採用検討するに至った理由を通して、「美作」の特長と、オープンシステム開発ツールのありかたを考察した事例報告である。

どちらかという営業寄りのお話であり、ソフトウェアシンポジウムの事例報告としては、なじまないかもしれないが、CASEツールのユーザ、ベンダの皆様にはなんらかの参考になると信じ、カテゴリーを恐れずに述べてみたいと思う。

弊社と「美作」の概略

■ 弊社の概略

創立15年、従業員200人を全国5拠点に展開する中堅ソフトウェアハウス(SEA賛助会員)。数年前まではメインフレームにおける受託開発(カスタムAP)が主体だったが、急激にオープンシステムに力を傾注しつつある。これまでLSI生産管理/制御を中心とするFA系、流通系、OA系などに主に対応。

■ 「美作」の概略

Windowsをクライアント基盤とするオープンシステム開発ツール。DB構築、メンテナンス、画面/帳票作成、プログラム作成、実行の各機能を提供。正式版初版は94年1月に販売開始。VAR:弊社を含む30数社。

「美作」の特長

- 数少ない「純国産」オープンシステム開発ツール
 - ◆ 完全に日本語な4GLとプログラムの高い可読性
- シンプルだが秀逸なUI
 - ◆ ウィザード(ガイド)タイプのプログラムエディタ
- 日本のビジネスAPに必要な機能に注目
 - ◆ 日付時刻の入出力、日本語入力の細かい制御、等
- シンプルで軽い動作
 - ◆ 機能分割された「非統合」環境
- 高いカスタマイズ性
 - ◆ 8/10/12個のボタンを兼ねたファンクションキー
 - ◆ カーソル、上書/挿入モード、起動時の英大/小文字
- 主な事例、ユーザからの声
 - ◆ メインフレームからのダウンサイジングツールとして採用し、工程管理システムを構築。画面の設計が楽に。(食品メーカ・営業支援)
 - ◆ メインフレームを経験したSEであれば簡単に使いこなせる。(ソフトウェアハウス・取引管理)
 - ◆ 導入から3週間で本番用システムが完成。(自動車部品メーカ・原価管理)
 - ◆ 簡単かつ安全にメンテナンスできる。(ソフトウェアハウス・販売在庫管理)
 - ◆ 半日の教育で1週間後には完全習得できた。生産性も倍に。(ソフトウェアハウス・倉庫管理)

VARとしての「美作」採用の背景と理由

■ メインフレーム/COBOL専業SEの余剰

ソフトハウス全般に言えることだったが、COBOL系SE・プログラムの余剰はその企業としての安易な体質が原因であったことは否めない。人月という量のみを指針とし質を問わない、促成栽培的な技術者教育でなければ、SEやプログラマがどのような言語やマシン環境に置かれていたにしろ、「余剰」など起こるはずはなかった。

■ 再教育投資の肥大化(特にC,C++,OO)

充実した基礎教育とその継続が実施されていれば、この再教育にそれほど多くの投資は必要ではないはずである。現に、C/C++にしるオブジェクト指向言語にしる、多くの優秀な技術者を保有するソフトウェアハウスが巨大な教育投資にあえいでいるとは限らない。

■ 独自性と初対面ユーザへのアピールの必要性

シェアの高い「メジャー」ツールへの対応は当然として、少々個性的なツールを扱うことで、独自性を。

VARとしての「美作」採用の効果

- 実績の少なかつた市場、業界への参入、アプローチに成功
- CASEマーケットへの名乗りによるカンパニーアピール、知名度の向上
- 再教育パス(の1つ)の確立
 - ◆ 低位置パス:Windows→Word/Excel→VisualBasic→美作, Access,(Delphi,OPO) etc.
 - ◆ 高位置パス:WindowsNT/Unix/Netware→C,C++,OO系各種→...

オープン系開発ツールの選択の指針

- 開発・メンテナンス担当者のスキルに合っているか?

ソフトウェアハウス側のスキルのみならず、ユーザの運用能力に見合っているか、あるいはユーザの介入(EUCを含む)が不要なシステムにできるか。
- 既存資産から何を継承するか(プログラム、ロジック、人)?

プログラムソースを継承するのはメインフレーム→オープンシステムでは難しく、場合によってはデメリットも多い。美作はロジックと人(プログラマ)の継承が可能。
- どの程度のサポートをツールベンダに求めるか?

特に輸入系ツールの場合、日本側が販売のみだったり、SEがいてもサポート能力が心配な場合も。また不具合対応も遅れやすい(不具合の発生しないツールなら別だ)。
- 業務の特性(エンタリー系、検索系、更新系 etc.)に合ったツールか?

検索系に比べ、エンタリー系はマウスよりもキーインのしやすさや既存APに近い操作性を求められやすい。

まとめ

- VARとして取り扱う事を含めると、CASEツールの選択はソフトウェアハウスの戦略そのものとなる
- ユーザ側、開発側の双方の個性に応じてCASEツールにも選択の幅が必要